

津

端

亨

編纂

現代短歌分類辭典

新裝判
33卷

津

端

亨

編纂

現代短歌分類辭典

新裝判
33卷

現代短歌分類辞典

新装版 33 卷

通卷 1 9 1

平成五年十二月二十日発行

定価一六、七〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 亨

発行所

現代短歌分類辞典刊行所

代表 津 端 亨

〒345

埼玉県北葛郡杉戸町宮前一九六一五

電話(〇四八〇)三八一〇〇四〇番

振替 東京三一九三一一四

目次

目次

	歌数	頁数		歌数	頁数		歌数	頁数
つゆ〔梅雨〕	八四〇	一	つゆのよ〔露の世〕	二	八九	つらぬ		二〇九
つゆ〔露〕	一九二七	二五	つゆばかり〔露許り〕	一	八九	つらなめーて〔列並〕		四七・一〇九
つゆあかり〔梅雨明〕	一	七四	つゆはら〔露原〕	九	八九	つらなり〔連なり〕		二二・一一一
つゆあけ〔梅雨明け〕	二八	七四	つゆばれ〔梅雨晴れ〕	四〇	九〇	つらなる〔連なる〕		二〇・二一六
つゆいり〔梅雨入り〕	六	七五	つゆびえ〔梅雨冷え〕	六	九一	つらなる〔列なる〕		四・一二二
つゆくさ〔露草〕	一二七	七五	つゆほど〔露程〕	一	九一	つらぬきとほす〔貫き通す〕		五・一二二
つゆぐも〔梅雨雲〕	一	七八	つゆほども〔露程も〕	一	九一	つらぬく〔貫く〕		九九・一二三
つゆぐもり〔梅雨曇〕	三七	七八	つゆわけぐるま〔露分車〕	一	九一	つらのかわ〔面の皮〕		一・一二五
つゆけく〔露けく〕	三三	七九	つゆのひぬま〔露不干問〕	三	九一	つらむ		五・一二五
つゆけし〔露けし〕	二六	八〇	つゆのぼる〔露上〕	一	九一	つらら〔氷柱〕		一二七・一二六
つゆさむ〔梅雨寒〕	六	八一	つよい〔強い〕	二三	九一	つららく〔列らく〕		五・一二九
つゆしぐれ〔露時雨〕	一	八一	つよがり〔強がり〕	九	九二	つりー〔ツリー〕		五・一二九
つゆじめる	一	八一	つよき〔強き〕	三八九	九二	つり〔釣り〕		八八・一二九
つゆじも〔露霜〕	一四六	八一	つよき〔強気〕	一	一〇三	つり〔吊り〕		六八・一二二
つゆぞら〔梅雨空〕	六二	八五	つよげ〔強げ〕	二	一〇三	つりがねにんじん〔釣鐘人參〕		一・一三三
つゆどき〔梅雨時〕	二四	八七	つよし〔強し〕	一四四	一〇三	つりいと〔釣り糸〕		一・一三四
つゆのいのち〔露の命〕	五	八八	つよまる〔強まる〕	六	一〇七	つりがねそう〔釣鐘草〕		一二・一三四
つゆのいり〔梅雨の入り〕	一	八八	つよみ〔強味〕	三	一〇七	つりかわ〔吊り革〕		一・一三四
つゆのおと〔露の音〕	五	八八	つらく	一	一〇七	つりし〔釣師〕		五・一三四
つゆのしずく〔露の雫〕	一	八八	つよさ〔強さ〕	一	一〇七	つりしのぶ〔釣り忍〕		三・一三四
つゆのたま〔露の玉〕	二四	八八	つらつら〔つらつら〕	四八	一〇八	つりどの〔釣り殿〕		二・一三四
つゆのま〔露の間〕	二	八九	つらなむ	四	一〇九	つりばし〔吊り橋・釣り橋〕		七・一三四
つゆのみ〔露の身〕	六	八九	つらなめる	一	一〇九	つりばな〔釣り花〕		一・一三五

つりびと〔釣り人〕	一 一三五	つるな〔蔓菜〕	二 一六九	つんつるてん〔つんつるてん〕	二 一九五
つりぶね〔釣舟〕	三五 一三五	つるのはし〔鶴の嘴〕	一 一七〇	つんと〔つんと〕	二 一九六
つりふねそう〔釣船草〕	九 一三六	つるはし〔鶴嘴〕	三七 一七〇	つんどら〔ツンドラ〕	八 一九六
つりぼり〔釣り堀〕	一 一三六	つるばみ〔椽〕	八四 一七一	つんば〔聾〕	四二 一九六
つる〔弦〕	一一 一三六	つるばら〔蔓薔薇〕	一四 一七三	て〔手〕	二〇八九 一九七
つる	一 一三七	つるべおとし〔つるべ落とし〕	一 一七三	であい〔出会い〕	一 二五九
つる〔蔓〕	三六七 一三七	つるまめ〔蔓豆〕	三一 一七三	てあか〔手垢〕	九 二五九
つるまめ〔蔓豆〕	三一 一四六	つるぼ〔蔓穂〕	二 一七三	てあし〔手足〕	一〇九 二五九
つる〔鶴〕	四三四 一四六	つるもどき〔蔓擬〕	三一 一七四	であし〔出足〕	一 二六二
つる〔吊る〕	五三 一五九	つるりと〔つるりと〕	一 一七四	てあて〔手当て〕	一 二六二
つる〔釣る〕	二〇 一六〇	つるれいし	一 一七四	てあみ〔手編み〕	一 二六二
つるうめもどき〔蔓梅擬〕	六 一六三	つれそう〔連れ添う〕	二 一七四	てあらい〔手洗い〕	三 二六二
つるおか〔鶴岡〕	五 一六四	つれだす〔連れ出す〕	一 一七四	であります〔であります〕	五 二六三
つるがおか〔鶴が岡〕	一〇 一六四	つれだち〔連れ立ち〕	五九 一七四	である〔である〕	一六一 二六三
つるがおか〔鶴ヶ岡〕	七 一六四	つれだつ〔連れ立つ〕	一九 一七六	であるから〔であるから〕	一 二六八
つるかめ〔鶴亀〕	一 一六四	つれづれ〔徒然〕	九八 一七六	であるく〔出歩く〕	三 二六八
つるぎ〔剣〕	六八 一六四	つれづれぐさ〔徒然草〕	二 一七九	であらう〔であらう〕	一 二六八
つるぎのまい〔剣の舞〕	一 一六六	つれ―て〔連れて〕	二〇六 一七九	ていあん〔提案〕	三 二六九
つるぎのやま〔剣の山〕	二 一六六	つれない	一 一八五	ていいち〔定位置〕	一 二六九
つるくさ〔蔓草〕	四九 一六七	つれなく	三九 一八五	でいぜるえんちん〔ディーゼルエンジン〕	二 二六九
つるぐみ〔吊るぐみ〕	一 一六八	つれなし〔つれなし〕	一六 一八六	ていいん〔定員〕	一 二六九
つるしがき〔吊るし柿〕	三 一六八	つれなしびと〔無情人〕	二 一八七	ていえん〔庭園〕	二九 二六九
つるす〔吊るす〕	三〇 一六八	つわの〔津和野〕	五 一八七	ていえんとう〔庭園灯〕	二 二七〇
つるありどおし〔蔓虎刺〕	一 一六九	つわぶき〔石蓐〕	一一三 一八七	ていおう〔帝王〕	一八 二七〇
つるでまり〔蔓手鞠〕	一 一六九	つわもの〔つはもの〕	一五九 一九〇	ていおうせっかい〔帝王切開〕	一 二七〇
つるつる	五 一六九	つんざく〔劈く〕	七 一九五	ていおん〔低音〕	一 二七一

ていおん〔低温〕	二二七	ていけい〔定型〕	三二七	ていさつせん〔偵察戦〕	一二七七
ていか〔定価〕	一二七	ていけいぶんごか〔定型文語歌〕	一二七四	ていさつへい〔偵察兵〕	一二七八
ていか〔低下〕	二二七	ていげき〔帝劇〕	一二七四	ていし〔停止〕	一〇二七八
ていかい〔低徊〕	三二七	ていけつ〔締結〕	一二七四	ていしせん〔停止線〕	三二七八
ていがくねんせい〔低学年生〕	一二七	ていけつあつ〔低血压〕	三二七四	ていじ〔定時〕	一二七八
でいかさん〔泥火山〕	二二七	ていこう〔抵抗〕	五五二七四	ていしせい〔低姿勢〕	一二七八
ていかひょう〔定価表〕	一二七	ていこうおん〔抵抗音〕	一二七六	ていじせい〔定時制〕	一二七八
ていかん〔諦観〕	七二七	ていこうかん〔抵抗感〕	一二七六	ていしつはくぶつかん〔帝室博物館〕	一二七八
ていきいれ〔定期入れ〕	一二七	ていこうき〔抵抗器〕	一二七六	ていしや〔停車〕	三九二七八
ていき〔定義〕	三二七	ていこうりよく〔抵抗力〕	一二七六	ていしやえき〔停車駅〕	一二八〇
ていき〔提議〕	一二七	ていこく〔定刻〕	三二七六	ていしやじかん〔停車時間〕	三二八〇
ていきあつ〔低気圧〕	一〇二七	ていこく〔帝国〕	六二七六	ていしやひょう〔停車標〕	一二八〇
ていききゅうぎょう〔定期休業〕	一二七	ていこくがくしん〔帝国学士院〕	一二七六	でいしや〔泥砂〕	一二八〇
ていきこうろ〔定期行路〕	一二七	ていこくぎかい〔帝国議會〕	二二七六	ていしやば〔停車場〕	二二三二八〇
ていきけん〔定期券〕	二二七	ていこくぐんかん〔帝国軍艦〕	一二七六	ていしゅ〔亭主〕	四二八六
ていきせん〔定期船〕	二二七	ていこくぐんじん〔帝国軍人〕	二二七七	ていじゅ〔庭樹〕	八八二八六
ていきびん〔定期便〕	一二七	ていこくしゅぎ〔帝国主義〕	一二七七	ていじゅう〔定収〕	一二八八
ていきゅう〔庭球〕	二二七	ていこくだいがく〔帝国大学〕	一二七七	ていじゅう〔定住〕	二二八八
ていきゅうせんしゅ〔庭球選手〕	一二七	ていこくばんざい〔帝国万歳〕	一二七七	ていしゅうは〔低周波〕	一二八八
ていきゅうび〔定休日〕	三二七	ていこくほてる〔帝国ホテル〕	一二七七	ていしゅかんぱく〔亭主閑白〕	一二八八
ていきょう〔提供〕	二二七	ていこくりくかいぐん〔帝国陸海軍〕	一二七七	ていしゅつ〔提出〕	一二八九
ていぎやう〔定業〕	一二七	ていこくりやうじかん〔帝国領事館〕	一二七七	ていじょ〔貞女〕	三二八九
ていきん〔提琴〕	一二七	でいさ〔泥砂〕	一二七七	ていしょう〔提唱〕	四二八九
ていくう〔低空〕	二〇二七	ていさい〔体裁〕	三二七七	ていしょう〔低唱〕	一二八九
ていくうひかう〔低空飛行〕	一二七	ていさつ〔偵察〕	一二七七	でいじやう〔泥状〕	一二八九
ていくうばくげき〔低空爆撃〕	一二七	ていさつき〔偵察機〕	二二七七	ていしよく〔呈色〕	一二八九

ていしん〔挺身〕	四二八九	ていてつ〔蹄鉄〕	六二九四	ていへん〔底辺〕	九三〇三
ていしんたい〔挺身隊〕	一二八九	ていてん〔定点〕	一二九四	ていばう〔堤防〕	八四三〇三
ていす〔呈す〕	一二八九	ていでん〔停電〕	四四二九四	ていばく〔低木〕	一七三〇五
でいすい〔泥水〕	一九二八九	ていてん〔帝展〕	一二九五	ていま〔テーマ〕	三三〇六
でいすい〔泥酔〕	二二九〇	ていと〔帝都〕	二〇二九五	ていりしきん〔低利資金〕	一三〇六
ていせい〔帝政〕	二二九〇	ていど〔程度〕	一〇二九六	でいり〔出入り〕	二二三〇六
ていせい〔訂正〕	三二九〇	でいど〔泥土〕	二〇二九六	でいりう〔底流〕	二二〇六
ていせつ〔貞節〕	二二九〇	ていとう〔抵当〕	一二九七	でいりゅう〔泥流〕	二二〇六
ていせん〔停船〕	二二九〇	ていとく〔提督〕	一五二九七	ていりゅうじょう〔停留場〕	五三〇六
ていせん〔停戦〕	八二九〇	でいと〔デート〕	一二九八	ていりゅうかしや〔停留貨車〕	二二〇七
ていぜん〔庭前〕	三九二九一	ていない〔邸内〕	二二九八	ていりゅうじょう〔停留所〕	一二三〇七
〔にわさき〕		ていない〔庭内〕	五二九八	ていりょう〔定量〕	二二〇七
ていそう〔貞操〕	三二九二	でいねい〔泥濘〕	四六二九八	ていれ〔手入れ〕	三八三〇七
ていぞく〔低俗〕	三二九二	ていねいに〔丁寧に〕	二二九九	ていれつ〔低劣〕	一三〇八
でいたあ〔データ〕	一二九二	ていねやま〔手稲山〕	二二〇〇	ていれつかん〔低劣感〕	一三〇八
ていたい〔停滞〕	三二九二	ていねん〔定年〕	二二〇〇	でいろ〔泥路〕	一三〇八
ていだい〔帝大〕	六二九二	ていねんせい〔停年制〕	一三〇〇	てうえ〔手植え〕	一三〇八
ていたく〔邸宅〕	三二九二	ていねん〔諦念〕	一四三〇一	ておくれ〔手遅れ〕	三三〇八
ていたらく〔体たらく〕	一二九三	ていはく〔停泊〕	六三〇一	ておけ〔手桶〕	二二三〇九
でいたん〔泥炭〕	四二九三	ていはくせん〔碇泊船〕	二二〇一	ておし〔手押し〕	一三〇九
ていち〔低地〕	八二九三	ていはくとう〔碇泊灯〕	一三〇一	ておどり〔手踊り〕	一三〇九
ていちたい〔低地帯〕	四二九三	ていはつ〔剃髪〕	一三〇一	ており〔手織り〕	一三〇九
ていちあみ〔定置網〕	一二九三	ていぶ〔底部〕	一三〇一	でか〔刑事〕	七三〇九
ていちゃく〔定着〕	五二九三	ていぶる〔テール〕	二七三〇二	でかい	一三二〇
ていちょう〔丁重〕	一二九三	ていぶるくろす〔テールクローズ〕	一三〇二	てかがみ〔手鏡〕	二〇三二〇
ていてい〔亭亭〕	五二九四	ていぶるすびいち	二二〇二	てがかり〔手掛かり〕	二二二〇

てかぎ〔手鉤〕	一三〇	てきかく〔適確〕	一三四二	てきする〔敵する〕	一三四九
でがけ〔出掛け〕	二三〇	てきかん〔敵艦〕	二八三四二	てきせい〔適性〕	一三四九
でかける〔出掛ける〕	二三一	てきぎ〔適宜〕	一三四三	てきせい〔適正〕	二三五〇
てかこ〔手籠〕	六三一	てきぎ〔敵機〕	九四三四三	てきせい〔敵性〕	五三五〇
てかず〔手数〕	一三一	てききかんじゅう〔敵機関銃〕	一三四五	てきせいけんさ〔適性検査〕	一三五〇
てかせ〔手枷〕	一三一	てききどうぶたい〔敵機動部隊〕	一三四五	てきせいこっかぐん〔敵性国家群〕	二三五〇
でかせぎ〔出稼ぎ〕	二二二	てききょてん〔敵拠点〕	一三四五	てきぜん〔敵前〕	二〇三五〇
てがた〔手形〕	六三一	てききらい〔敵機雷〕	一三四六	てきぜんじょうりく〔敵前上陸〕	一三三五一
てがたな〔手刀〕	二二二	てきぐん〔敵軍〕	四三四六	てきだん〔敵弾〕	三七三五一
でかでかと	一三二	てきこうふく〔敵降伏〕	二三四六	てきち〔敵地〕	六三五三
てがぬま〔手賀沼〕	二三二	てきこく〔敵国〕	七三四六	てきちゅう〔敵中〕	二三五三
てがみ〔手紙〕	四〇九	てきこころ〔出来心〕	一三四六	てきちゅう〔敵中〕	一三五三
てがめ〔手瓶〕	二二五	できごと〔出来事〕	一一三四六	てきてりゅうだん〔敵手榴弾〕	一三五三
てがら〔手柄〕	九三二	てきさす〔テキサス〕	三三四六	てきど〔適度〕	三三五三
てがらがほ〔手柄顔〕	一三五	てきし〔敵視〕	一三四七	てきとうかばくだん〔敵投下爆弾〕	一三五三
てがる〔手軽〕	二二五	できししや〔溺死者〕	三三四七	てきはい〔敵背〕	一三五三
てき〔敵〕	四八七	てきしゅう〔敵襲〕	一七三四七	できばえ〔出来栄え〕	三三五三
でき〔出来〕	二二	てきしゅう〔摘出〕	四三四七	てきばき〔てきばき〕	八三五三
できあき〔出来秋〕	三三四	てきしやう〔敵将〕	五三四八	てきばくだん〔敵爆弾〕	二三五四
てきい〔敵意〕	九三四	てきじょう〔敵情〕	三三四八	てきはつ〔摘発〕	一三五四
できうる〔出来得る〕	一三四	てきじん〔敵陣〕	三〇三四八	できふでき〔出来不出来〕	二三五四
てきえい〔敵影〕	一三四	てきじんち〔敵陣地〕	二三四九	てきへい〔敵兵〕	二六三五四
てきおう〔適応〕	一三四	てきす〔適す〕	一三四九	てきほうだん〔敵砲弾〕	二三五五
てきおん〔適温〕	二三四	てきず〔手傷〕	二三四九	てきみかた〔敵味方〕	六三五五
てきかく〔的確〕	二三四	てきすと〔テキスト〕	一三四九	できもの〔出来物出来物できもの〕	一三五五
てきかく〔適格〕	二三四	てきする〔適する〕	二三四九	てきよう〔手器用〕	一三五五

てきりょう〔適量〕	一三五五	てさき〔手先〕	一六三六一	てそう〔手相〕	五三七五
てきらかさん〔敵落下傘〕	一三五五	てさぐり〔手探り〕	六三六二	てそうみ〔手相見〕	一三七五
できる〔出来る〕	三三三五五	てさばき〔手捌き〕	一三六二	てぞめ〔手染め〕	二三七五
てきるだけ〔出来るだけ〕	二三五六	てざわり〔手触り〕	三三三六二	てだい〔手代〕	一三七五
てきるい〔敵塁〕	七三五七	でし〔弟子〕	七四三六三	てだし〔手出し〕	一三七五
てきれい〔適齡〕	一三五七	でしお〔出潮〕	七三六五	てだすけ〔手助け〕	三三七五
てぎわ〔手際〕	七三五七	てしかが〔弟子屈〕	四三六五	てだて〔手立て〕	九三七五
でぎわ〔出際〕	一三五七	てしごと〔手仕事〕	一三六六	てだま〔手玉〕	六三七六
てく〔木偶〕	七三五七	てじな〔手品〕	六三六六	でたらめ〔出鱈目〕	五三七六
てぐす〔天蚕糸〕	二三五八	てじなし〔手品師〕	一三六六	てだれ〔手だれ〕	三三七六
てくせ〔手癖〕	一三五八	でじま〔出島〕	二三三六六	てぢか〔手近〕	七三七六
てくだ〔手管〕	一三五八	てじゃく〔手酌〕	一三六七	てちょう〔手帳〕	四四三七七
てぐち〔手口〕	二三五八	てじゅん〔手順〕	三三六七	てつ〔鉄〕	二六三七八
でぐち〔出口〕	二三五八	でしょう	一四三六七	てついろ〔鉄色〕	六三八四
てくてく〔てくてく〕	一三五九	てじょう〔手錠〕	三三六七	てっか〔鉄火〕	一三八四
でくのぼう〔木偶の坊〕	二三五九	です〔です〕	一三三三六八	でっかい〔でっかい〕	二三八四
てくび〔手首〕	一八三五九	てすう〔手数〕	一三七三	てつがく〔哲学〕	一六三八四
てくらがり〔手暗がり〕	一三五九	ですから〔ですから〕	二三七三	てつがくしよ〔哲学書〕	一三八五
てぐるま〔手車〕	六三五九	ですく〔デスク〕	八三七三	てつがくひ〔哲学碑〕	一三八五
でくわす〔出会す〕	一三六〇	てすさび〔手遊び〕	四三七三	てつがくしや〔哲学者〕	二三八五
てごころ〔手心〕	一三六〇	てすと〔テスト〕	七三七三	てつかぶと〔鉄兜〕	二九三八五
でこぼこ〔凸凹〕	二三三六〇	てすり〔手摺り〕	二〇三七四	てっかまき〔鉄火巻〕	一三八六
てごころ〔手頃〕	一三六一	てずれ〔手擦れ〕	三三七四	てづかみ〔手掴み〕	五三八六
でざいん〔デザイン〕	四三六一	てせい〔手製〕	五三七四	てっかり〔てっかり〕	一三八六
でさかり〔出盛り〕	二三六一	てぜい〔手勢〕	一三七五	てっかん〔鉄管〕	二九三八六
でさかる〔出盛る〕	二三六一	てぜま〔手狭〕	六三七五	でっき〔デッキ〕	一八三八七

てっきょ〔撤去〕	一三八八	てっそく〔鉄則〕	一三九九	てつぼう〔鉄棒〕	九四〇七
てっきょう〔鉄橋〕	八六三八八	てったい〔撤退〕	二三九九	てつぼう〔鉄砲〕	二七四〇七
てっきん〔鉄筋〕	一〇三九〇	てつだい〔手伝い〕	五三九九	てつぼうやま〔鉄砲山〕	三四〇八
てっきん〔鉄琴〕	一三九〇	てちゅう〔鉄柱〕	一四三九九	てつぼうあめ〔鉄砲雨〕	一四〇八
てつくづ〔鉄屑〕	一二三九〇	てつたい〔鉄槌〕	四四〇〇	てつぼううち〔鉄砲打ち〕	一四〇八
てづくり〔手作り〕	一八三九一	てつづき〔手続き〕	一四〇〇	てつぼうゆり〔鉄砲百合〕	一八四〇八
てっこう〔鉄鉋〕	三三九一	てつてい〔徹底〕	七四〇〇	てつや〔徹夜〕	二八四〇九
てつこうし〔鉄格子〕	四三九一	てつてい〔鉄蹄〕	一四〇〇	てつり〔哲理〕	四四二〇
てつこうじょ〔鉄工所〕	二三九二	てつとう〔鉄塔〕	三四四〇〇	てつりん〔鉄輪〕	七四一〇
てつこつ〔鉄骨〕	八六三九二	てつどう〔鉄道〕	四二四〇一	てづる〔手蔓〕	一四一〇
てつさ〔鉄鎖〕〔てつくさり〕	六三九四	てつどうくさ〔鉄道草〕	一八四〇二	てつろ〔鉄路〕	四三四一〇
てつさい〔鉄材〕	一七三九四	てつどうしょう〔鉄道省〕	二四〇三	ででむし〔ででむし〕	一四一一
てつさく〔鉄柵〕	一二三九五	てつどうばし〔鉄道馬車〕	五四〇三	でどころ〔出所〕	二四一二
てつさび〔鉄錆〕	四三九五	てつどうぼうせつりん〔鉄道防雪林〕	五四〇三	でない〔でない〕	四二四一二
てつざん〔鉄山〕	五三九五	てつとうてつび〔徹頭徹尾〕	一四〇三	でなおす〔出直す〕	一四一三
でっさん〔デッサン〕	二三九五	てつぱい〔撤廃〕	一四〇三	でながざる〔手長猿〕	三四一三
てつしう〔鉄舟〕	五三九五	てつぱん〔鉄板〕	四九四〇三	てならい〔手習い〕	二四一四
てつしゅうじ〔鉄舟寺〕	三三九六	てつびつ〔鉄筆〕	一四〇五	てならし〔手馴らし〕	一四一四
てつしゅう〔撤収〕	一三九六	てつびょう〔鉄鉍〕	一四〇五	てならす〔手馴らす〕	一四一四
てつじょうもう〔鉄条網〕	一八三九六	てつびん〔鉄瓶〕	三八四〇五	てなれ〔手慣れ〕	一一四一四
てつじん〔哲人〕	五三九六	てつぶん〔鉄分〕	二四〇六	てなわ〔手縄〕	三四一四
てつす〔徹す〕	一七三九七	てつぷん〔鉄粉〕	四四〇六	てにす〔テニス〕	一八四一四
てつする〔徹する〕	二三九七	てつぺいせき〔鉄平石〕	四四〇六	てにすこおと〔テニスコート〕	一二四一五
てつせき〔鉄石〕	二三九七	てつぺき〔鉄壁〕	一四〇六	てにすばうる〔テニスボール〕	一四一五
てつせん〔鉄線〕	五〇三九七	てつぺん〔天辺〕	一八四〇六	てにてに〔手に手に〕	一〇四一五
てつせん〔ゆうしてつせん〕〔有刺鉄線〕	一〇三九九	てつぺん〔鉄片〕	四四〇七	てにもつ〔手荷物〕	四四一六

てのうち〔手の内〕	一四二六	てもち〔手持ち〕	二四六〇
てのうら〔手の裏〕	一四二六	てもと〔手元〕	一四六〇
てのこう〔手の甲〕	四〇四二六		
てのした〔手の下〕	一〇四二七	計	一五四八一首
てのすじ〔手の筋〕	四四二七		
てのなか〔手の中〕	八四二八		
てのひら〔掌・て〕	七九〇四二八		
でばあと〔デパート〕	五四四四〇		
てはい〔手配〕	一四四一		
ではいり〔出入り・出這入り〕	二〇四四一		
てばこ〔手箱〕	三四四二		
てはず〔手筈〕	四四四二		
ではずれ〔出外れ〕	二四四二		
てばた〔手旗〕	五四四二		
でばな〔出鼻〕	三四四三		
てばなし〔手放し〕	六四四三		
てばなす〔手放す〕	二四四三		
でばほうちよう〔出刃包丁〕	一四四三		
ではらふ〔出払う〕	一四四三		
でばん〔出番〕	一四四三		
てひどい〔手ひどい〕	一四四三		
てびょうし〔手拍子〕	五四四三		
てふうきん〔手風琴〕	三四四四		
てぶくろ〔手袋〕	七二四四四		
でぶしゃう〔出無精〕	一四四六		
てぶそく〔手不足〕	三四四六		
でふね〔出船〕	一四四六		
てぶら〔手ぶら〕	二四四六		
てぶり〔手振り〕	三〇四四六		
てぶんこ〔手文庫〕	一四四七		
でべそ〔出臍〕	一四四七		
てほどき〔手解き〕	一四四七		
てほんちよう〔手本帖〕	一四四八		
てま〔手間〕	一一四四八		
てまえ〔手前〕	一一四四八		
てまえ〔出前〕	一四四八		
てまくら〔手枕〕	三七四四九		
てまだい〔手間代〕	一四四九		
てまど〔出窓〕	九四五〇		
てまね〔手真似〕	二四五〇		
てまねき〔手招き〕	二四五〇		
てまめ〔手まめ〕	三四五〇		
てまり〔手鞠・手毬〕	二七四五〇		
てみじか〔手短か〕	二四五一		
てみず〔出水〕	一一二四五一		
てみずがは〔出水川〕	五四五四		
てみせ〔出店〕	一四五四		
でめ〔出目〕	一四五四		
でも〔でも〕	一一二四五四		
でも〔デモ〕	三八四四九		
でもくらしい〔デモクラシー〕	三四六〇		
でもこうしん〔デモ行進〕	二四六〇		

シャンソンの十あまりあはれに聴きて出づ歩道梅雨ふりて鈴懸の落葉⑤

十五の石五・二・三・二・三とぞ置きにける梅雨の霽れ間の白き

沙庭①

住職が取り出す画軸の二つ三つ梅雨の晴れ間の若葉照り来て②

棕櫚の花こぼるる土の干割れつつ今年も梅雨は降らずもあるか④

純白の桔梗の花がすがすがしく四つ五つ咲いて梅雨もあがるらしい⑤

い⑤

正午近く日の照りつくる梅雨どきに雁皮の花の咲けるはひとつ

(宿墨詠草)

錠剤を飲み溶液を射して梅雨に入るB1不足のわが日々の違和③

醬油瓶の大きいアドバールン梅雨どきの街の憂鬱に傾きただよふ①

書棚よりとりいだす書物の革表紙しめり冷めたく梅雨ふかみたり

(新万葉集二)

初夜の鐘は梅雨ふくむ野山ふるはせて僧房のわれにせつなく聞ゆ

②

如流の書「乾坤万里眼時序百年心」表装成りて梅雨あけにけり

②

正月に来てまさみしきこと言ひし姉死ゆけり蚕時の梅雨を

しろく匂ふ金柑の花白々と夜目に顕ちゐる梅雨あけんとす①

白きはなこぼれ寄りたるあたりより梅雨の溢るずぶ濡れの苔

(鉄刀木)

高安国世

中村正爾

野田孝之

西沢麗葉

渡辺順三

岡麓

鐸静枝

荒木暢夫

今井規清

北見志保子

土岐善磨

金子信三郎

印田巨鳥

林菊之輔

白つつじ二つ咲きそめてせまき庭は梅雨け立つなり曇りたる空
白萩の若葉ぎしぎしと萌えいでぬ一月経なば梅雨に会ふべし④

(角川文庫)

白もじの花に白蝶一つ飛ぶから梅雨でりの夕あがりぞら(小笹生)

深青葉昨日も今日も梅雨の降る庭にききたる雨蛙の声⑥

すがすがと梅雨の晴間を活けし花臺ひを払ふすがともなれ①

スカンポの花散りこぼし子らが帰る梅雨あけの空のまぶしい入道雲

雲

杉垣に蝶一つとまりをりけ重き梅雨の朝ぐもりかも⑩

梅ひ来し鰯が夜の厨辺に鳴く音ひそけし梅雨ふらむとす①

すずしげに枝うち延びて匂ふ合飲の梅雨の朝明のあかり仄々し⑥

(角川文庫)

雀とると飽かぬ仔犬がたくらみの小走りをかし梅雨の晴間を

(山桜の歌)

裾辺より硝子戸徐々に明りくる梅雨夕まぐれいたく静けき⑦

巢立ちせしをさな雀かおぼつかな薨に飛べり梅雨の晴間を②

すでにして梅雨思はしむるこの日頃鈴蘭の葉に雨ふりやまず②

ずばり買うレインコートよ梅雨に似るわが日日に遮断機おろす②

小書庫の壁ぞひに立つ四五本の竹いたく鳴る梅雨の風の日⑧

世界一雨多き国の梅雨の雨流しやらぬか今は溜るか⑭

石竹の花活けしめぬ朝ゆふに梅雨のしめりの来る壁を背に

煎茶のれんせん草の匂ひこもる梅雨どきとなりて朝を憂鬱なり

高田浪吉

宮柊二

岡麓

今井邦子

尾山篤二郎

川崎陸奥男

今井邦子

桐田露村

宮柊二

若山牧水

宮柊二

杉田鶴子

藤森朋夫

井戸川美和子

宮柊二

窪田空穂

持田勝穂

前田夕暮

禅堂の畳の上に赤蟻子たまゆら歩む梅雨となりにし①(新萬葉集八)
倉庫河岸昏く梅雨降り荷役了へていまかへりゆく少年の群⑥
蒼茫と梅雨の焼原暮れむとすとどまる人ありまれに灯を見る④
総門も楼門も萱の屋根深し梅雨にけぶれる平林禅寺(孤状列島)
底冷ゆる雨もよひの風や空梅雨の日の夕ぐれのころもとなき

森 二郎
木 俣 修
植 松 寿 樹
林 丕 沙子
宇都野 研

竹にしむ梅雨の一日の頭の重き妻と言ひつつ肩もみあひぬ①
筍の穂になる先端を刈りはらひ梅雨も程あくあがるとすらし②
竹の梅雨しとどにおつる縁近く山の人らは飯食みてをり⑥
竹の葉のふりつむままに雨となりてをぐらき庭に梅雨は来向ふ②
丈伸びてほしいままなる秋のきりん草梅雨雨曇る日の今日また暑
し⑩

桐 田 蔭 村
桐 田 蔭 村
尾 上 柴 舟
西 郷 春 子
松 村 英 一

底冷ゆる梅雨の夜風を寝る際に瑠璃戸細めにあけて入らしむ

宇都野 研

竹藪の小峽へ落す林泉の水むしろ澄みつつ梅雨どきにして

林 菊之輔

粗朶垣の縄手路行けば梅雨ふかし貝殻つけるその粗朶垣に②

中 村 憲 吉

(鉄刀木)
竹藪の竹のひまより梅雨ばれの多摩の流れはほの白きかも

和 田 山 蘭

俎の魚いきいきと眼をあけり暮れ蒼みたる梅雨の厨に

島 木 赤 彦

(きさらぎ)
たたまれてゐし花びらのほぐれゆき神苑の菖蒲梅雨にしづもる

三 谷 千 里

染物を教へし娘らと梅雨匂ふ銀座裏歩むこころ満ちつつ②

野 田 孝 之

(季節の彩)
立葵の傾くまでに梅雨降りて思ひ沈めばとめどもあらず①

安 立 スハル

空梅雨の陽に白けたる山原にりんごは紙の袋かぶれり③

山 田 百 合 子

立ちあふひ桔梗雁皮と長梅雨を咲きつぐ花に病床倦まず④

奥 貫 信 盈

空梅雨の浅葱の空にこまごまとねむりて合飲の葉のゆらぐかな①

谷 鼎

建て付けの会はずなりたる雨戸繰る梅雨のあけくれ暗き心に①

印 田 巨 鳥

村莊の空梅雨の日に来あひたり栗の垂り花照りつつまほし

宇都野 研

たてつけの重き戸をあけ又締めぬ何軒下か梅雨の夜更に②

平 野 宣 紀

退職の辞令待ちつつ梅雨に入りあぢさゐの花碧く満ちたり①

滝 口 英 子

田につづく青葙沼の浅所には梅雨ふかみ来て浸す水あり⑤

松 村 英 一

田植には水はやりぬ梅雨は今はやまなむ麦もほすべく

間 島 冬 道

田のあぜをこなたかがみに又手つかふ人かげ見れば梅雨あがりけり

北 原 白 秋

高きひくきはらかなせる青松葉の若き芽立に梅雨ふりかかる①

蔵 檀 堂

田の蛙ひそみて鳴かず梅雨の曇りは深く冷えを覚ゆる(雪間草)

岡 麓

高ボッチ梅雨雲ふかく乗鞍も黒姫山もあり処はわかず③

久保田 不二子

たのめなきおもひ湧き来も梅雨あけて部屋まだ暗き畳のおもて①

宮 柊 二

たかむらに梅雨の霞たち山鳩は娑婆苦耐へよといふごとく啼く⑤

宮 柊 二

(角川文庫)

高屋根の無線電信のボール幽かにも風にやさをり梅雨晴の空に

宇都野 研

竹の蛙ひそみて鳴かず梅雨の曇りは深く冷えを覚ゆる(雪間草)

岡 麓

竹叢の窓に梅雨あり静謐をしめて王維の詩に見入りつつ①

桐 田 蔭 村

たのめなきおもひ湧き来も梅雨あけて部屋まだ暗き畳のおもて①

宮 柊 二

竹煮草の葉裏吹きかへす風ありて催す梅雨の空定まらず

浜 中 林 太 郎

(角川文庫)

宮 柊 二

(新萬葉集八)

たはやすく言葉やはらげてうち対ふ梅雨の霽れ間の陽の射し来る
に①

旅に会ふ梅雨のふかみにこもりゐてひとりさびしき温泉の溢れか

も①(私稿)

旅にさめて心よろこべり山川をとざす梅雨季の霧明らみ来

たびやかたふる梅雨のつれづれにもたる書みな読みつくしけり

(新萬葉集別)

球形のまとまりくれば梅雨の花あぢさゐは移る群青の色に

卵生みつつ動かぬ蝶が壁にあり肌粘く梅雨のあがらむとする①

たちちねを恋ひ思ふ云はざらむ梅雨なが寒う夕焼けてけり①

たり曇る梅雨のま上に栗の花の白く散りたるをふみにじりたり①

丹躑躅のあかきにそそぐ雨細し梅雨のいたるもやがてにあらむ②

蒲公英の絮散りこみて梅雨くらき部屋の出入にまつはり飛べり①

地下道の梅雨の湿りに臥やる人見て過ぎいまは怪しともせず④

筑後川汪洋として梅雨どきの夕照り赤く映るを望む

父あらぬ母あらぬ若き悲しみの例ふれば梅雨の音によみがへる②

乳にほふ幼子に来る蚊をうちて梅雨のあめ蒸すゆふひととき③

父の死にし齢になりて病妻と梅雨暗き日をさびしみをれり

父ゆきて年は経にけり家の井戸この梅雨時にあまた濡れる①

血腥さ世の趨勢は梅雨どきの我らが生活を圧迫し止まず①

地虫なく夜の季節感梅雨すぎて暑に向ふ間の涼しさならん②

厨女らまたむくれをり梅雨どきは金魚も瓶に腐りてあらし⑩

荒木 暢夫

臼井 大翼

宇都野 研

東伏見宮妃周子

宇都野 研

岩上 とわ子

穂積 忠

大熊 長次郎

長沢 美津

大村 呉樓

金子 不泣

大野 満

田谷 鋭

木俣 修

生田 蝶介

古泉 千桎

常見 千香夫

辻本 敬三

北原 白秋

厨戸のおぼおぼしきはたださへや柿の葉畳ね梅雨くだりつなり⑩
蝶低く舞ひ来る朝の庭芝に日ぐせの梅雨の降るけはひなり多磨二
ちよいと寄つて用事のことだけ話しかへる梅雨のふる日のわび
しい心④

調練の朝銃の音久方の空に轟き梅雨あけにけり

除虫剤撒きて根元をいたはりし合歓咲きつづく梅雨に入りてより

⑥

通勤の汽車の窓さき麦刈られはや田水のる梅雨霽れの照り①

疲れつつ朝なるに眠き梅雨ぶりのもの暗き家に親しみていふ

着きし人群がり出づる停車場のそともは暮れて梅雨のふる②(玉琴)

つくづくと梅雨に倦みある昼過ぎを畳の上に蟹のぼり来も①

土くさき川につながる郷愁にかなしき疼き梅雨に入る日よ①

梅雨の雨ゆふべ降りいでつ早苗田のむかうの家の牛のながなき

(湧井)

粒ほどの柿の青実の落ちつぎてふたび梅雨の幾日かつづく②

妻が背に朝朝灸をするにつつ梅雨すぎて汗のながる土用⑤

つまぐれの悲しき花はさきそめて梅雨のあひだは季をうつろふ①

摘まれたる茶の芽のあとの目にたちて梅雨づく雨の降り出でにけり

梅雨の間に延びしあさがほからみあひていぶせくなりぬ蔓をしつ

まる①

梅雨青き庭ぬきいでて白玉を空に綴れり秦山木の花⑤

吉野 秀雄

北原 白秋

石川 澄水

西村 陽吉

今井 邦子

宮 柊二

荒木 暢夫

高田 浪吉

荒木 暢夫

馬場 あき子

岡 龍

藤好 淳之

西田 嵐翠

佐藤 佐太郎

長沢 美津

豊島 逃水

吉野 秀雄

吉野 秀雄

梅雨あがりあかるき朝をこの浦に山桃売りのおりて来にけり

橋本徳寿

梅雨あがり赤き石榴の花五つ根方に落ちて土によごれぬ

小山朝子

梅雨あがり朝日をうけて葉煙草の青き大葉の揺れ豊かなり①

立花馨

梅雨あがり代掻きをへし水の田に新麦藁の鳩が映れり

北原白秋

梅雨あがりくわつと柘榴の花々に朱をかみくだくヒステリックな

清水信

陽②

梅雨上り山霧立てばそこなく笹鳴き聞こゆ山のはざまゆ③

中沢庭柯

梅雨上る気配にありて浜木綿の釵なす葉に夕光とどく②

遠野左田子

梅雨あがるこの朝空のみどり遽し雲は南風にのりて散りつつ

山崎喜久一

(多磨二)

梅雨あがる空と思ひてなでしこの明るき庭に子を抱いて出る

月原弘範

(新萬葉集五)

梅雨あくれば朝顔うりの呼び声に目をさまされて朝の街にいづ②

水野葉舟

梅雨あけて青葉に照る日の光烈しきぞよき怠^{なま}ける身に⑥

花田比露思

梅雨あけて乾く衢の舗道に色ながれたる紙つきてをり

竹尾忠吉

梅雨明けて九十度近き午後の工場舗に自熱せる爐は現しさもあら

野田孝之

ず①(新萬葉集九)

梅雨あけてさやかに夏をおぼえけり今朝のあさ目に合歡木の花咲

岡麓

く(小笹生)

梅雨あけて空さだまらぬこの夏や玻璃甕の金魚つぎつぎに死す①

吉田正俊

梅雨あけててりつけたるに上畠の麦の黄熟の穂立ての並ぶ(冬空)

岡麓

梅雨あけて照りの暑さよアスファルト溶けし車道に降りて横切る

竹尾忠吉

②

梅雨あけて夏に入りゆく日のかをり後楽園に燕もあそぶ(朝の自如)

田畑善兵衛

梅雨あけてにぶく明るむ屋根の上荒廃の感この夏ふかし③

窪田章一郎

梅雨あけて西日の強くてりつけむ暑さにむかひ病むは嘆かし⑥

岡麓

梅雨明けて俄かなる日のかげまぶし流れかがやく山の上の雲②

塚田青紀

梅雨あけて微熱ひきたり糊かたききたるシャツの純白を着ん①

久保井信夫

梅雨明けて枇杷の芽立ちの華やぎぬ黒き揚羽のふれて過ぐるあり

荒木暢夫

①

梅雨あけて星のよき夜となりにけり庭の杏の熟れ匂ひつつ

木俣修

梅雨明けてまた降りつづく雨くらし君が茶の間もうち湿りつつ

島田白虹

梅雨あけてよき日和かな青虫が若葉かじる音かはずみてきこゆ①

荒木暢夫

梅雨明けとならむ空よりにほふがに日ぐれの雲は峽に棚曳く①

寺門一郎

梅雨明けぬいまだあけずと言ひあへり病み伏すわれの枕べの人①

竹添履信

梅雨あけの朝の板戸にはらはらと白き蛾いくつ匍ひて居にけり

石川かう

(多磨二)

梅雨明けの暑き日つづく風あれば直射光を肌を受けとめてゆく①

松井如流

梅雨明けの暑ささだまりくる日日にて日常の規矩を重く感じつつ生

栗原潔子

く③

梅雨明けの朝まだ早く草しげき荒野を行きぬ近路なれば⑥(冬空)

岡麓

梅雨あとの庭に下りたちわがぬける雑草はすでに実をこぼしあぬ

藤森朋夫

①

梅雨あとの日和定まらぬ蒸し照りを巢替へ鼯か子を啜へ出る①

荒木暢夫

梅雨あとの瓢の池のにこり水に水蜘蛛が浮きて無心なるさま

芦田高子

(流検)

梅雨あとのむしくる部屋にたのめなく今日もありにき痛み処ひえて①

鹿兒島 壽藏

梅雨あめの冷氣はしみて青葉よりしたたる雪音をやめざる⑧

高田 浪吉

梅雨荒く青葉に走り鳴る音を真昼聞きつつ部屋に一人をり⑦

宮 柊二

梅雨いく日けふたまたまの青空に家ぬちみなあけて風吹きとほす

島内 八郎

(多磨四)

梅雨幾日へだてし雲のけふ晴れてありしまなる青空のいろ

島内 八郎

(多磨四)

梅雨幾日今朝は好みの藍深き紫陽花かなし汝と語らむ①

沼波 美代子

梅雨いく日青葉の梢に日のさせば明るむ枇杷の実を見せにけり

四賀 光子

梅雨幾日吾子の玩具の飛行機の翼に貼りし紙たるみをり②

若林 牧春

梅雨いく日けふたまたまの青空に家ぬちみなあけて風吹きとほす

島内 八郎

梅雨幾日湿気あがりて厨土間ながしもとはに黴うくが見ゆ①

野沢 柿葺

梅雨幾日へだてし雲のけふ晴れてありしまなる青空のいろ

島内 八郎

梅雨遅き暑き日射の町出でて空気荒れたる埋立地を歩む①

宮 柊二

(角川文庫)

梅雨おそき馬鈴薯畑さ夜ふけて月の下びにたつ霞あり④

山脇 一人

梅雨重う垂れ込めて霧らふ神宮の林の上の頬白のこゑ①

荒木 暢夫

梅雨重く被さる夜はふたり子のうへを鬼子母のところに嘆く①

中城 ふみ子

梅雨がかり夏めく窓に心こめて家の男童毛虫をぞ飼ふ

金子 信三郎

梅雨がくるそれまでの空の明るさを大切がるに晴る日すくなく

長沢 美津

⑤

梅雨かけて夏至に入れば和楽器のしめり勝ちなるうとましき日日
梅雨がすむ沖の島より時折に石を掘りある発破ひびける
梅村 哲義

つゆぐさの梅雨ふみわけて星の夜を逢ひにきたのにあひに來たの
に①
清水 信

梅雨雲を透きてほのけき日のありかつくづく見れば動きつつあり

滝坂 陽之助

⑤

梅雨雲を透く日蒸しつつ罌粟の花明日は崩れむ花をたもてり

若林 牧春

梅雨ぐもを洩れる日光にさゆれつつ栗の垂花いまさかりなり②

松岡 貞総

梅雨暗き水槽の水ときに揺れ葉長く曳き金魚泳げり⑨

若林 牧春

梅雨くらき庭に灯火を捧ぐるごとやぶくわんさうの朱花咲きつづ

遠野 左田子

く②

梅雨くらき軒屋根にして切切と雀の雛の鳴く声はする③

佐野 四郎

梅雨くらき野中にひくくみづうみは沈み湛へてありといはずやも

栗原 潔子

③

梅雨くらき部屋にわが見る朝鏡雛も白髪もかすみてあはれ③

清水 乙女

梅雨くらく降ると見えしが雲切れて暑き日となる一乗寺道①

野沢 柿葺

梅雨くらくゆふぎり草とむかひるぬ大きなしみをしばしわすれ

三浦 義一

て③

梅雨ぐもりひややけき気の打沈み木々の若葉の一葉ゆるがぬ④

窪田 空穂

梅雨けふは濡れて若葉のこずゑ吹く南風となりにけるかな⑤

太田 水穂

梅雨けふるしのめの芦の秀にすがり声しぼり啼くか雛よしきり

木俣 修

は③

梅雨けぶる路の並樹の沙羅の花崩れ落つべく過ぎたるもあり①

野村 清

梅雨煙る街を行きつつゆき逢ひに近寄る馬の臭ひ濕れり④

若林 牧春

梅雨こめて目見に重たき青葉山ほととぎす啼く声ぞ聞ゆる①

土田 耕平

梅雨ごもりひさしくなりぬ夜はさめて青き蛙を部屋よりすてつ

芥子沢 新之介

(多磨四)

梅雨来んとしつつまだなる谷ぞこに山峽川の磧ぞ白き⑧

宮 柊二

梅雨前の気だるき昼をきようと啼く丹頂の声後つづくなし

山田 恵美子

(多磨三)

梅雨さむき木原に栗の花白し生き存へしことの寂しさ③

佐野 四郎

梅雨寒くいく日つづきて雛鶏ののこれる二羽もつひに斃れぬ⑩

土岐 善磨

梅雨さりぬまづはなだ草初夏の瞳をあげてよろこびを云ふ(常夏)

與謝野 晶子

梅雨去ると白がすり着し夕より多くおもはぢあぢきなきこと⑨

與謝野 晶子

(春泥集)

梅雨しげき幾日のなかに咲きつぎてバラの白妙母の忌迫る

小島 経彦

(毎日歌壇)

梅雨しげき木下に見ればいささは藍ふくみたる紫陽花の花⑤

松村 英一

梅雨しげき葉かげにあそぶ何鳥か君目守らずに鳴かず久しき①

森山 汀川

梅雨しげき林の緑流らへば木の精舞ひ出づる暮色なりける①

野田 孝之

梅雨しげき夜ごろとなりてわれの眼も寂しきひかり持たんと思ひ

鈴木 幸輔

し①

梅雨しぶく夜ごろを心くるしめる君の面に脂うきをり①

山口 茂吉

梅雨湿けをかこちつつ来し庭の面照れば乾割れぬけふのひと日に

臼井 大翼

②

梅雨じめりふかきあしたの黒土に鉄砲百合は根づきたるらし②

神原 克重

梅雨じめり吹く晝風にとまとうの苗はみながらおもく揺れつゝも①

塚田 青紀

梅雨じめりほてる夕べの木がくれに黄なる毒蛾の生まれ止まずも

木村 清男

(朝日短歌)

梅雨じめり頼き目なり水仕場に今朝ものぼりし蛭蟪のあと①

野沢 柿茸

梅雨湿める天地にして種々の虫の類は生れ出でけり⑥

岡本 かの子

梅雨じめる風に汗ばみて駆る車砂埃あげて山峽を縫ふ①

荒木 暢夫

梅雨湿る庭にいく度も色変へるあぢさいに似るわれの生きざま①

久保井 信夫

梅雨じめる夜の小路をわが来れば地虫鳴くなり声かすかにも⑩

窪田 空穂

梅雨じめる夜更往診よりかへり来て心さびしく妻の名を呼べり

村田 豊成

(新万葉集八)

梅雨じめる壘の冷えのしるき夜やわびしく独り茶をすするかも

宮川 溪声

(多磨二)

梅雨過ぎてただちにきびしき夏の照り舗道のひかり目に痛きまで

堀内 通孝

④

梅雨過ぎてなほも降りつぐ日癖雨このごろ見ねば庭も荒れたり⑥

北原 白秋

梅雨過ぎて俄に青む庭の苔つかれしわが目ゆきてとどまる⑭

窪田 空穂

梅雨過ぎて又ふりつづく霈霖には物みな腐る人のこころも⑭

川田 順

梅雨過ぎてみなぎり照らむ日を思ふこころをこめて書も読まざり

村田 利明

し①

梅雨すぎてよく晴れあがる山の空蒼きよらにわが眼を洗ふ④

塚田 菁紀

梅雨既にあがりたらしき青空やいや涯もなき青き空はや⑥

花田 比露思